
楽園の果て

翠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の果て

【Nコード】

N1009X

【作者名】

翠月

【あらすじ】

「あなたは、？神様？なのですよ」
突如記憶を失った少女。

彼女は楽園と呼ばれる国の？神様？と呼ばれるものだった。

異世界で起こる恋愛ファンタジーです。

<1>（前書き）

ゆっくりなペースになってしまいかもしれませんが、完結させられるよう頑張ります。

これはオリジナルです。無断転載などしないよう、お願いします。誤字脱字等がございましたら、遠慮なく言ってください。

< 1 >

緑豊かな草原。

どこまでも広がるその大地。

その一部に、少女が一人倒れていた。

綺麗に伸ばされた漆黒の髪が無造作に散乱し、力無く腕や足が伸びている。

一見すれば、死んでいるのかと思うほどだ。

白く透けるような肌を風がふわりと撫でる。

少女は閉じた瞳の奥で、混乱したように目を泳がせていた。
動かない。

目を開けようとするが、どれだけ力を入れても目蓋が持ち上がらない。

指に力を入れても、目蓋同様、動かないのだ。

まったく言う事の聞かない体に、少女の不安は増してゆく。

自分の身に、何が起きているのだろう。

ただ唯一分かるのは、自分の体がとてつもない疲労感に覆われているということ。

ここがどこなのか、なぜ自分がこんなにも疲れ、倒れているのかさっぱりわからない。

自分の、名前さえも。

「っ……！！」

瞬間、強烈な目眩に襲われ意識が薄れていく。

意識が途切れる寸前、自分の体に当たる風がピタリと止まった気がした。

次に少女が目覚めたのは、白く柔らかなベッドの上だった。

<2>

ぼんやりと薄っすら目を開けた先に見えるのは、白い天井。

少女は背中にあたる柔らかな感触に体を預けた。

先ほどより疲労感は軽減しており、体も自由に動くようになっていた。

腕に力をいれ、ゆっくりと体を起こす。

そして部屋を見渡し、小首をかしげた。

窓から吹く風になびく白いカーテン。小さめのサイドテーブル。

服が何着も入るであろう大きなクローゼット。

見たこともないものばかり。

少女はふと視線を落とし、自分の着ている見慣れない服にゆっくりと手を伸ばした。

肌触りのいい布地。

少女が着ているのはゆったりとした、柔らかな生地で作られた服。あまり装飾はなく、シンプルといえるものだった。

けれどこれも、やはり知らないもの。

目に映るすべてのものが、少女の記憶には無い。

「ここは」

「お目覚めですか？」

ちいさくつぶやいた彼女の声に、優しげな声が重なる。

音をたてずにドアを開けて入ってくるのは、まだ幼さの残る少年だった。

「よかった。起きても平気そうですね」

ベットの横にちょこんと置かれるサイドテーブルにタオルを置き、少年は続ける。

「カイ様が見つけて……ああ、カイ様にご報告をしておかなければ」
軽く手を打ち、少女へと向き直った。

優しげな瞳を向けられ、少女はたじろいだ。

「三日間も寝ていらしたんですよ？ それに、あんなところに倒れていらして……」

そうだ。

自分は倒れていたんだと、少女は思い出す。

けれどどこではわからない。酷く疲れ、動けないほど疲労していた自分。

それを、ここまで運んできてくれた人がいるということなのだろうか。

そうなれば見知らぬベッドで寝ていたということも、説明がつく。

「どうなされました？」

俯き、己の手を凝視していた少女を覗き込む。

思考の波に飲まれていた少女は我に返り、小さく首を振った。

「あの……」

「はい」

「ありがとうございます」

突然礼の言葉を言い出した少女に少年は目を瞬かせる。

「ここまで、運んできてくださって」

見も知らぬ相手を、ここまで運んできてくれたのだ。

もしかすれば、誘拐ということもあるかも知れない。けれど目の前の少年からは優しさしか感じられない。

それは酷く慕っていた相手に向けるほどの。

丁寧に会釈する少女に、少年が困惑の瞳を浮かべた。
おかしい。

少女から感じる小さな違和感に少年は戸惑った。

「フィリア様……？」

少年の口から紡ぎだされる名。

それはこの国にいる、？神様？と呼ばれる少女の名。

「本当に、覚えていないのですね？」

「はい……すみません」

白衣らしき物を着た皺だらけの老医者言葉に、少女は申し訳なさそうに頷いた。

「謝ることではないですよ」

ゆったりとした、温かみのある声に再び少女が頷く。

医者は座っている椅子から腰を浮かし、体を反転させる。

「やはり、記憶喪失ですね……どうなされますか？」

「どうするもこうするも、なあ……」

小さく開かれた医者目に映るのは、項垂れた少年が三人。

そのうちの一人が、ちいさく呟き椅子から立つ。

「失った記憶を取り戻す手立ては、あるんですか？」

少女に寄り添うように座る少年が不安げに聞いた。

先ほど、彼女の部屋へと訪れた少年だ。

少年は少女の様子に違和感を感じ、医者呼び、ここにいる二人の少年も部屋へ呼んだ。

そして医者が診察し 出た答えが、

「記憶喪失ということは、なにかの拍子に思い出すしかないだろうな」

椅子に腰掛ける整った顔立ちの少年が言う。

数秒の沈黙を置いて、椅子から立っていた少年がうめき声をあげた。

「あー、もう！！ っていうかなんで記憶喪失になったんだよ！？」
苛立った声を発し、力任せに汚れひとつ無い床を蹴る。

鈍い音が響き、痛みが足へと伝わる。それさえも、今の少年には苛立ちへと変わった。

「それはですね、カイ様」

小さく唸る、カイと呼ばれる少年に医者が声をかけようとしたとき、

「あの……」

話の中心である少女がおもむろに口を開いた。

宙をさまよっていた複数の視線が、一斉に少女に向けられる。

「あ、あのっ……私……」

向けられた視線にうろたえ、徐々に小さくなる声。

困惑した瞳は左右に揺れ、言葉を探すように口はちいさく開閉している。

「わ、私……」

少女は口ごもる。

どうすればいいのかわからなかった。

どこかに倒れていた自分をここまで運んでくれたんだろうと思っていた。

けれど、突然医者を呼ばれ、あれこれと色んなことを聞かれた。

そのすべては、自分の知らないことばかり。

知らないはずの目の前にいる少年たちは、優しさや慈しみのある瞳で自分を見る。

何が何だかわからない少女は、ただその視線に戸惑うばかりだった。

「フィレア様。あなたには記憶が無い。どうして記憶を失うことになったのかすら、わからないのでしょうか」

「え……？」

医者は言葉を紡ぐ。

いまだ困惑し、怯えた表情をしている少女に優しく言い聞かせるように続けた。

「あなたは、フィレア・リン・ローディア。この国の神様なのです」
「よ」

< 2 >

少女は医者をまじまじと見た。

からかっているのだろうか。記憶が無い自分を。

「疑いをお持ちですか」

苦笑する医者に、少女は口を引き結んだ。

疑いがないという方がおかしい話だろう。

「嘘ではありませんよ。からかっているわけではありません」

まるで彼女の心を見抜いたかのように、医者は言葉を続ける。

「フィレア様。それがあなたの名です」

「フィレア……？」

それが自分の名前だと。目の前の医者は言うのだ。

戸惑い一つも何度も口の中でその名を転がす少女 フィレアを

見ていた少年たちは微笑する。

「では、フィレア様 」

「フィレア様……！」

腰を浮かした小柄の少年の声に、甲高い少女の声が重なった。

扉が壊れそうなほど勢い良く開け、その勢いのまま両腕を広げフ

ィレアに抱きついた。

「フィレア様……！ よかった、ご無事で……！！」

力強く抱きしめ、半ば固まっているフィレアを何度も抱きしめる。

「ああ、本当にご無事で……！」

「エ、エレナさん！ ちょ、ちょっと！」

一度放し、そして再び抱きしめようとした少女、エレナを少年が慌てて止める。

「なによ、カルサ」

止めに入った小柄な少年、カルサをぎろりと睨みつけた。

吊り上がったエレナの目に、びくりとカルサが震える。

「あのっ……」

エレナに抱きしめられ、その腕の中に埋もれているフィレアがもごもごと必死でなにかを訴えた。

「あ、あの！」

苦しい。

必死で少女の腕をほどこうと暴れていると、フィレアがほどくよりも先に彼女の体に絡まっていた腕がするりと抜けた。

「す、すみません。つい」

エレナに開放され、安堵するフィレアに頭を下げた。
下げた頭を戻す際、無造作に束ねられた髪が揺れる。

フィレアは酸素を肺に送り込み、何度かむせた後目の前にいるエレナに視線を戻した。

見た目は、同じ年くらいだろうか。

少し気の強そうな目をしていて、動きやすさを主した作りの服装で所々なにかの汚れの跡がついており、作業中だったのか袖は捲くられ白い腕が露になっていた。

エレナは見つめてくるフィレアに不思議そうな顔をし、すぐになにかを思い出したように言葉を発した。

「忘れておられるんですね。……私はエレナと申します」

「エレナさん？」

につこりと微笑むエレナの表情に、少しだけ悲しさのようなものが見えた。

それはここにいるフィレアを除く全員の表情に表れているもの。

フィレアはその表情の意味を探ろうとしたとき、

「フィレア様、また後日来ますが……くれぐれも無理はなさらないように」

まるで懐かしむような眼差しでフィレアたちを見ていた医者には念を押し、荷物をまとめて部屋から出て行った。

扉が閉まると同時に、エレナはフィレアの手を取り立ち上がらせる。

「ではフィレア様！　まずは御召しかえですね！」

そう声を弾ませたエレナは、少年たちを部屋から追い出し大きな
クローゼットを豪快に開けた。

「ささ、これなんてどうですか？」

エレナの手に持つているフリルが数え切れないほどついているワンピースに、フィレアは勢い良く首を振った。

「そうですかあ……？ では、こちらなんかは？」

フィレアが拒否したことに気を悪くした様子はなく、また次の服を引っ張り出す。

けれど同じクローゼットの中に入っているのは、どれも同じようにフリルがつき、どこに着ていくのだと問いたくなるような派手なものばかりだった。

エレナはフィレアが気に入らなかった服を次々とベッドの上に放り投げる。

「わ、私はこっちの……」

エレナが覗き込むクローゼットの隣にある、もうひとつのクローゼットを開けた。

そこには今彼女の着るシンプルで動きやすそうな服が揃っていた。その中の一着を手に取り、自分の前に当てる。

「そんな質素なもの……」

これといった装飾もなく、殆どが無地の服を楽しそうに比べているフィレアに不満げに頬を膨らます。

「あ、これがいい」

たくさんある服を掻き分け、ひとつの服を手を取った。

他の服と同様、動きやすそうな、柔らかな布地で作られた服。城に住んでいる、いわゆるお嬢様などが着るようなドレスものではなく下町に住む民が着るような服。

自分の胸元に押し当て、満足そうに微笑むフィレアにエレナが苦笑じりのため息をついた。

「やっぱり、着てくれないのですねえ」

「え？」

「こちらのクローゼットにある服、すべて私が注文した服なんですよ。けれどフィレア様、一度も着てくださなくて……」

だから、記憶をなくした今のフィレアなら着てくれるのでは思っただがやはり無理だった。

記憶は無くても、やはり彼女は彼女なのだ。

「フィレア様は、変わっていませんね。その服、一番のお気に入りだったんですよ？ よく着ていました」

今と全く変わらない、けれどフィレアの纏う空気が少し違っている。

以前のフィレアの姿がエレナの脳裏を掠めた。

「お気に入り？」

「ええ。なんでも動きやすいとか何とか……私は不満だったんですけど、カイ様とヴェント様はそれでいいって」

以前の彼女は服へのこだわりが凄かった。

動きやすさはもちろん、軽く、多少のことでは切れないものがないと、いつも服を注文している服屋にこと細かく言っていた。それでも気に入ったものではなかったときには、自ら下町へと足を運び、あちこちの店を物色しては買いあさっていた。

現在、記憶を失くしているフィレアの大人しめな性格と殆ど変わらないが、活発な一面を持ち合わせていたのだ。

やれやれというように、エレナは軽く首を振った。

フィレアは小首をかしげ、不思議そうにつぶやく。

「カイ様とヴェント様……？」

「はい。カイ様とヴェント様は、フィレア様を守る 守護する者なのです」

とある一室の扉を音もたてずに閉め、少年は息を吐き出した。

「どうした、カイ？」

「いや……」

カイと呼ばれる少年は虚を睨んだ。

「フィレア様が記憶を失くした原因って、俺たちだよな。ヴェント」
「……」

ヴェントは顎に手を当てた。

「さっき医者に聞いたのだが、フィレアの着ていた服には大量の血がついていたらしい。だが、診察した体には傷ひとつ無いという」

「……俺も聞いた。？力？を使っただろうな。だから、記憶を……」

「そのせいかどうかはわからない」

「だけど、フィレア様を危険な目にあわせたのは俺たちのせいだろうか。守る、立場なのに」

代々、ローディア家の？神様？には二人の守護がつく。

それはローディア家の女が受け継ぐ？力？を狙ってくる輩から守るため、そしてさまざまな災厄から守るためにと、定められたからだ。

けれど、カイとヴェントはそれが出来なかった。

守るはずのフィレアを危険な目にあわせ、記憶を失わせた。

「カイの気持ちは分かるが、もうひとつそれ以上に重要なことがある」

鋭く細められた目が、カイを捕らえた。

「フィレアが傷を負ったという事は、誰かが傷を負わせたということだ」

「っ　……」

「また襲ってくる可能性もある」

「……城に、か？」

「どうだろうな。とりあえず、城の警備は厳重にしておく」
ヴェントの言葉に、カイは頷いた。

踵を返し部屋から出て行ったヴェントを確かめ、手に持たれた短剣を少し抜き、ゆっくりと双眸を閉じた。

軽やかな足取りで、フィレアは目を見開かせてあたりを見回していた。

動くたびに彼女の胸にはちいさな金属音がする。

それはフィレアが起きた時から身につけられていたもので、エレナに聞くとそれは自分がとても大切にしていたものなのだと聞かされた。

見ただけで安物とわかるそのネックレスは、不思議と愛着がわく。どうしてこれを持っていたのか彼女にたずねたが、何も知らないという風に首を振るだけだった。

フィレアはそつとネックレスに触れ、視線を戻す。

広々とした空間に、楕円状の天井やいくつもある大きな扉。長く続く廊下に所々細かな模様が彫られている壁、全てが白を基調とした内装で、そこはまさに異国というものだった。

「そんなに珍しいですか？」

あちこちを見ては感歎の声を上げるフィレアにエレナは苦笑する。

「だ、だって……」

珍しいというものではない。

こんな建物はそうそう見れるものではないだろう。

「以前のフィレア様は慣れていらしたのですけれど」

「ねえ、その……私って、いなくなってたの？」

目覚めたとたんに大騒ぎになり、皆口々に無事でよかったと言っていた。

それは長い間自分がここにいなかったということ。

「そうですよ。ある日はったりと。どこを探してもフィレア様はおられなくて……皆で大騒ぎだったんですよ」

「それって、どのくらい……？」

「ちょうど一ヶ月です。本当に……今まで、どこにいらっしやった

んですか……！！」

一ヶ月。それはあまりにも長い時間。

その間、姿もない？ファイレア？を、何人の人が心配したのだろう。それを考えることは容易だった。

「ごめんなさい」

薄っすらと涙を浮かべるエレナに、ファイレアは謝った。

「もう、どこにも行かないでください……」

「うん」

何人の人が、どれほどの心配を　彼女も、その人たちの一人だったのだろう。

涙を拭い、気を取り戻したエレナは少し恥ずかしそうに笑い、

「次に行く場所ですけど、温室と図書館どちらがいいですか？」
そう言ってファイレアの手を引いた。

楽園と呼ばれるこの国。

度々訪れる旅人から、そのまた旅人へ、この国に来た人たちが伝えていくのだ。あの国はまさに楽園だと。

国の象徴であるファイレアの暮らす城は、たくさんの設備が整えられ、一般の人でも開放されている場所がある。

全てを白を基調とした内装で、来る者は皆心を癒された。

さらに、このグランド国は驚くほど平和なのだ。

長い間戦争も無く、人々は平和に暮らしている。下町も、皆ほとんど不自由なく生活していた。ある一部の場所を除いては。

けれどそれは観光客や旅人が訪れるような場所ではなく、この国に住む民でさえもその場を避けるようにして一度と行くことは無かった。

そんな平和で綺麗なところを見て、？楽園？と呼ばれるようになったのだろう。

「図書館というよりも資料室と言ったほうが正しいですね。資料室にはたぶんエルダ様がいらっしゃるか」と

綺麗に掃除された廊下を歩きながら、ファイレアの歩調にあわせて

いるエレナが口を開く。

「じゃあ資料室からお願ひしてもいい？」

彼女の問いににっこりとエレナが微笑んだ。

可愛らしいその顔に、フィレアは頬を緩めた。

髪を無造作にくくり、服に対してあまり気を使っていないようだが、可愛らしい顔をしている。きっときちんと化粧をし、服を見立てれば見違えるほど綺麗になるだろうとフィレアは思う。

「さあ、着きましたよ。ここが資料室です。一般公開はされていませんが、今は時間外ですね」

周りとは浮きだつて見える古めの扉に、資料室と書かれたプレート。

この部屋以外はすべて綺麗にされているのに、ここだけがどうしてか古ぼけていた。

「ここに置かれている書類や本は量が多すぎるので、他の部屋に移したり出来ないんです。貴重なものもありますし、なくなったら大変ですからね」

フィレアの疑問に気付いたかのように、エレナは苦笑した。

ぎい、と音をたてて扉を開けた。

湿ったような、カビの臭いのようなものが鼻にまとわりつく。

「あれ、フィレア？」

その臭いに僅かに眉をひそめたフィレアの耳に、男の声が耳朵を打つ。

「フィレアと、エレナも。珍しいな」

たくさんの棚に、溢れかえるような本。その中に佇む男が片手を挙げた。

「えつと……？」

歳は二十歳半ばだろうか。慣れ親しんだように話しかけてくる男の口調にフィレアは言葉に詰まった。

自分が記憶を失っているということを、彼は知らないのだろうか。だとすれば、ここは言つたほうがよいのか。

「ああ、知ってるよ。記憶を失くしてるんだって？」

あれこれ考えている彼女に、男は優しく微笑みかけた。

「様子がおかしいって血相変えたカルサが言いに来たんだ」

「そう、なんですか」

「うん。だから気に病むことは無い。君のせいじゃないんだからね」
「……はい」

ちいさく頷くフィレアに、再びエルダは微笑んだ。

片方の手に持たれた分厚い本をぱたりと閉じる。

「自己紹介、したほうがいいかな？ 私はエルダ。情報処理のような仕事をしている。この城や国のことならすべて把握しているんだ」
「情報処理？」

「うん。殆どこの資料室にいるから、何か聞きたいことがあればここに来るといい」

「は、はい。ありがとうございます」

につこり微笑んだエルダに、エレナは眉をしかめた。

「エルダ様には申し訳ないんですけど、私、ここはちょっと……」

「おや、エレナは嫌いかい？」

「き、嫌いというわけではないんですけど……この空気が、少し資料室には古い本が混じっているせいか、微妙な空気が漂っている。あまり本が好きではないエレナにとってはあまり好んで行く場所ではないだろう。」

言葉を濁したエレナに、男は苦笑した。

「ところで、なんでここに？」

「フィレア様を案内していたんです。それで、ここに」

「そうか。じゃあ、もう温室には行ったのかい？」

「いえ」

「今はきつと綺麗な花が咲いているよ。カルサが一生懸命育てたからね」

「……カルサはそれしか出来ませんから。もっと使えるようになるまで、私がこき使います」

嫌味をふくめて言うエレナを見、エルダは視線を動かした。

途中から会話に参加しなかったフィレアが、いくつもある棚に押し込められた本や書類を興味深そうに眺めている。

そんな彼女を見て、エルダは瞳を細めた。

どれもが微妙に模様が違い、けれど全てが白の数多くある部屋の
一室で、老けた医者はずなっていた。

ぎしり、と木製の椅子がちいさく鳴く。

「なぜ、あんなところに……」

顎をなでて首をかしげていると、

「どうしたんだ？　ローマス」

扉を開け入ってきたカイは不思議そうに問う。

「おや、カイ様」

「フィレア様の服を持ってなにうなつてたんだ？」

フィレアの診察にあたっていたローマスの手にある、血まみれの
服を見る。

血は今ついたばかりのように赤くはなく、時間が経ち黒く変色し
て固まり、服はどこどころ切り刻まれ一番大きく裂けているのは
背中だった。

そこには大量の血が　フィレアの血がついている。

「いえ。……フィレア様を見つけたのはカイ様ですよね？」

「ああ」

「なぜ、あんなところに倒れていらしたのでしょう？」

「あんな所？」

小首をかしげるカイに、老医者は静かに頷いた。

「ここから何キロメートルも離れています。しかも何もない草原で、
フィレア様は一人でいらしたのでですよ」

カイの脳裏にあの日の映像がよみがえる。

まずは近場からだと、城や国からそう遠くはないところを探しあ
たった。けれど、フィレアは見つからず、搜索範囲を広げた。

そして一番最初に発見したカイは、青々とした草に埋もれ、全身
を血で染めたフィレアに息を呑んだ。

びっくりとも動かないその体に、カイの不安は増し震える足取りで近づいた。

幸い呼吸はしていた。カイは安堵し、急いで城へと運んだのだ。だが、今思い出すと不思議でなかった。

何も無い草原だ。ましてやここから離れすぎている。そんな場所に一人で、ましてや誰にも告げずになど

「カイ様」

思考の波にとらわれていたカイはローマスの声で我に返った。

「そのとき、周りには誰もいなかったのですか？」

「あ、ああ。たぶん……」

あのときはフィレアのことで頭がいっぱいになり、周りのことをよく見ていなかった気がする。

誰かいなかったかと聞かれれば、素直にいなかったとは言えないだろう。

語尾を濁したカイはフィレアの着ていた服に視線を落とす。

無残に切り刻まれた服は、今現在彼女が着ているものと全く同じもの。

お気に入りだといっていたその服は、念のためにと以前フィレアが二着買っていた。

「姫様……フィレア様は、何の用でそこへ……？」

ぼつりとローマスがつぶやく。

「わからない。でも、フィレア様を斬った奴は俺が見つけ出す」

つぶやいた老医者言葉に、カイは前を見据えて答えた。

その瞳に宿るのは、深い後悔の念。

そんなカイをちらりと見て、わずかに眉をひそめ、諦めたような口調で言った。

「そうですねえ。結局の所、一番動けるのはカイ様とヴェント様だけでしょうから」

「やっぱりそうなるか……。まあ、任せる気もないけどな」

老医者はちいさく頷いた。

代々伝わるローディア家の末裔であり、現神様のフィレア。

一見幸せそうに暮らしているように見えるが、そういうわけでもなかった。

彼女にではなく、この国自体に反感を持つものも少なくはない。そんな者たちから狙われる対象となるのは、今この国の一番上、神様であるフィレア。

それは、記憶を失ったからといって変わるものではない。

そもそもあまり表舞台に立たなかったフィレアの顔を知る民はあまりいない。ある日突然いなくなったことと、記憶を失ったことだけは伝えられていた。

けれど、反感を持つ者にはそんなことは関係ない。むしろこのことを喜んでいるのかもしれない。

何も知らない彼女を、利用できる。

そんなフィレアを真に守れるのは、おそらく

< 1 >

「え……えっと？」

「どうぞお飲みください」

茫然とするフィレアの前には大きなテーブルがある。そこに置かれているのは、テーブルを敷き詰めるほど並べられたティーカップ。事前にお茶が入っており、しかも全部種類が違うのだ。

鼻腔をくすぐる香りを漂わせていくつもの波紋を広げているお茶を見、フィレアは隣でにこやかに笑うカイに視線を移した。

「どういうこと？」

「フィレア様が好まれていたお茶を用意しました。これを飲めばもしかすると、記憶が戻るのではと思ひまして」

フィレアは顔を引きつらせた。

「飲めというのか。」

このいくつあるのか数えるのも嫌になるほどあるカップに、たっぷりと入れられたお茶をすべて。

「それと、同じお茶とそれをアレンジしたものもあります。どれも気に入らしていたものばかりです」

「いや、あの」

味を変えればいいという問題ではない。

だが、隣で微笑みながらわずかな期待を寄せているカイを見て飲まないわけにはいかない。

カイやヴェントたちと出会って、実際には記憶がないだけなのだが、カイは時々突拍子もないことをする。それは彼女のことを思っているのだが、当のフィレアはおかしな人だと認識されていた。

そうとも知らない彼は、フィレアがお茶を飲むのをそわそわと見ている。

フィレアは目の前に置かれたアンティーク調のティーカップを持ち、そっと口をつけた。

ふんわりとした優しい香りが口に広がり、甘さ控えめに作られたのかわからないが、それも丁度よく合っている。

フィレアは思わず顔をほころばせた。

「おいしい」

「それはよかった。そのお茶はカルー産なんです。誰からも好まれる味を目指して、とその茶葉を作った本人が自ら売り込んできて」へえ、とフィレアは息をもらした。

妙に詳しいところを見ると、このお茶は全部カイが入れたものなのだろう。

次々と口をつけていくフィレアはちいさく頷いていた。

それぞれの葉にあわせ、入れ方や微妙に違う温度がきちんとあっている。以前の彼女がこのお茶たちを好んでいたのも頷けた。

もともと、カイが入れたお茶だからなのだが。

「どうですか？」

「うーん……ごめん。だめみたい」

「そうですか……」

カイが僅かに顔を曇らせる。

いくら飲んでも、これといって変化はなかった。そう安々と思いつ出すはずもないのだけれど。

ハーブティーを口に含み、フィレアは何か言おうと口を開け、

「フィレア？」

聞こえてきた声に口を閉ざした。

伺うような口調に続いて扉を開けて入ってくるのは、白髪を揺らすヴェントだった。

「なにを……」

している、と続けようとしたヴェントの目に、以上というほどのカップが映った。殆どが入れたままの状態と変わらないが、フィレアの周辺のカップだけは残りが僅かになったものと、すこし減ったものがあつた。

ヴェントは驚いたように目を見開かせる。

「これ、全部お茶か？」

「うん。カイが入れてくれて」

「入れてって……全部飲むのは無理じゃないのか？」

「うるさいぞヴェント。ほっといてくれ」

カイはちいさくヴェントを睨む。

「フィレアはカイの入れるお茶が好きだったからな。記憶が戻るかもしれないと思ったのか」

「ヴェン。黙ってる」

鋭くつくヴェントにカイは再び睨みつける。

そんな二人のやり取りに、フィレアはちいさく笑った。

ヴェントは時間が経ち少し冷めてしまったお茶を手に取り、飲むとしてふと手を止めた。

「フィレア。何か聞きたいこととかないか？」

「え？」

突然の言葉にきよんとするフィレアに、ヴェントは続ける。

「知りたいこととかあるか？」

気遣うような声色に、フィレアは数秒置いて、

「私の……家族……」

目覚めてからフィレアの部屋にはたくさんの人が訪ねてきた。けれど、自分の家族と思われる人は一人もいなかったのだ。

もしかすれば自分には家族が、親がいないのではないのかと思い、フィレアは不安げな声でそう答えた。

そんな彼女の気持ちを読み取ったのか、カイが優しい声で答えた。

「フィレア様のお父様、国王がいらっしゃいます」

「お父さん？」

いると分かったのか、僅かに頬が緩む。

「あの、他は」

二人を見上げるフィレアに、カイとヴェントは顔を見合わせて、ヴェントが口を開いた。

「前神様であるアリア様が　フィレアの母親がいる。……でも、アリア様はフィレアを生んですぐに亡くなった」

「ですから今いるのはお父様である、ダヴィン様だけです」

二人の言葉にフィレアは瞳を伏せ、

「……そうなんだ」

と、ぽつりと言った。

「ねえ、お父さんはどこに？」

父親がいるのであれば、娘であるフィレアの顔を見にはこないの
だろうか。

長い間行方をくらまし、やっとの思いで見つければ、記憶を失っていた娘。そんなフィレアを、心配ではないのか。

そんな疑問と、何も分からないところで一人、頼れる相手がいる
のならと。

そして、自分の父親の顔を見たいと思う。

「ダヴィン様は部屋に引きこもってます。会うのは無理だと思いますよ」

高く澄んだ声に顔を上げ　見上げた先に、拗ねた様子のエレナ
がいた。

「おい、エレナ」

「カイ様。本当のことを言っただけです」

慌ててエレナの言葉をとめさせようとするが、それはあっさりと
かわされてしまった。

「だってあの方、長い間部屋にこもりっぱなしですよ？　部屋から
出たことなんて、一年に一回あるかどうか……それに私、顔も見た
ことありませんもの」

早口にまくし立て、嫌味を含んだ物言いは、エレナがダヴィンを
あまり好いていないことが分かる。

「そ、そうなの……？」

「そうですよ、フィレア様。フィレア様のお父様である国王を悪く
言うつもりはありませんが、私はあの方はあまりよろしくありません

ん。こうしてやっと帰ってきた娘を一度も見ることもなく、部屋にいるんですよ？ きつと全身力ビだらけです！！」

拳を握って高々と宣言するエレナをフィレアはぼかんと見上げた。会ったこともない相手のことをここまで言えるのは一種の才能ではないのだろうか。

「とにかく！ 会わないほうが身のためです」

「でもエレナ。フィレアが会いたいといっている」

会いたいというのなら、会わせてやるべきではないか。

彼女にすれば、今一番頼れる者である親が、父親じゃないのだ。そんな気持ちを含めていった言葉だが、エレナは軽く鼻を鳴らした。

「なんです。そういうのは親から来るべきでしょう？ なのに一目ですら見に来ようとしなんて、最低です」

国の象徴である国王に対して随分な口の利き方だな、と今の発言を聞いた人々は思うだろう。

だが当の本人は気にする様子はない。

「エレナ、お前仕事は？ こんなところで喋ってていいのか？」

このままでは一時間は軽く続いてしまっただろうエレナの話に、カイは話をそらす。

ああ、とエレナはちいさく頷き、

「終わりましたよ。あ、でもあと洗濯を三回ほど残ってますけど。すぐに終わります。私洗濯は得意なんですよ！」

につこりと微笑んだ。

「カイ様とヴェント様は？ 今日はやけに城内が騒がしく感じましたけど……なにか慌てているような？」

「今日はな……。警備のために、少し人数を増やしたんだ。休憩に入っている人も警備にあたらせた」

「もともと少ないからな、そうでもしないと無理らしい。門番も含めて十五人というところだ」

平和を保ってきたこの国は、城に直接襲い掛かる輩はいないため、

警備の者たちは少数しかない。

もしものことがあった場合や下町での暴徒が暴れた場合、カイとヴェントが出ることになっている。

「あ、あの……」

ふと、フィレアが口を開いた。

「私も何か、手伝うことある……？」

毎日忙しくエレナたちが働いていることを知っている。

その様子が脳裏に浮かんだ。

いつまでも休んでいるわけにはいかないし、自分だけ何もしないというのも申し訳ない。

「フィレア様はだめです！　なにも心配なさらなくて大丈夫ですよ」
「で、でも」

「大丈夫だ。それに、お前はこの国の神様なんだからな」

エレナとヴェントにやんわりと断られ、フィレアは俯いた。

何もなくていいといわれても、それではいい、わかりましたと思えるわけがない。

少し思案し　そして不意に、

「神、様」

ヴェントから言われた言葉がよみがえる。

それは前にローマスから言われたのと同じもの。

その酷く聞きなれないその単語に、ざわりと胸が騒いだ。

<2>

「あつた……」

フィレアは資料室の一角へと近づき、目的の本を見つけた。

二度目に入った資料室の独特の臭いにはまだ慣れず、フィレアは軽く柳眉を寄せる。

背表紙に書かれている文字を確かめ、そつと引き抜きじつと見つめた。

ずいぶん昔からあつたのだろう。

所々が破けており、かすれて見えない部分もあつた。

「神様、とは」

しっかりと本を抱えてページをめくっていると、見出しにはそう書かれていた。

フィレアは一度双眸を閉じ、ゆっくりと開ける。そして並んだ文字を目で追った。

神様とは。

今から数百年前、グランド国が出来てまもなく女兒が生まれた。

元々女兒が生まれることが少なかったため、めでたいことだと国を挙げてお祝いをした。

華を愛でるように育てられたその少女は、成長するにつれ、次々と不思議なことが起こるようになった。

まだ平和ではなかったグランド国は隣国から襲われ、反撃し、ほぼ連日が戦いに明け暮れた。けが人は次々と出て死者も数え切れないほど生まれ、下町は全壊。辛うじて生きているのはなんとか逃げ切った兵士や国王とその妻。そして、その少女。

もう敵の攻撃からは逃げられず、ともに戦うことも出来ない。このままでは死者を増やすばかりだと判断したとき、大量の怪我を負った兵士が運ばれてきた。

血まみれで何かを訴えようとした兵士の手に少女の手が重なった。

ちいさな手で兵士の手を優しく包み込み、双眸を閉じる。

なにをしているのかと誰かが問おうとした時　　みるみるうちに、
兵士の傷が治ったのだ。

驚き目を見開いている兵士に少女は優しく微笑みかけ、そして意識を失った。

これが、ローディア家女兒に伝わる？力？の始まり。そして、神様と呼ばれる所以の始まりでもあった。

「なに、これ」

そこまで読み終えて、フィレアは息を吐き出した。

なんともいえない感情がわき上がる。

そして、それよりも。

「戦争って、そんな……」

戦争が起こっていたことなど、まったく知らなかった。国は平和に満ち溢れ、誰もが幸せに暮らしているのだと思っていた。

けれど、それは間違いだったのだ。

昔なのだから、戦争があるのは回避できないことなのだろう。

だが平穏な生活を送っていたフィレアにはその事実でさえも戸惑いを隠せない。

平和で保たれているのは一部だけ。平穏の裏に、どんな残酷なことが起こっているのかも知らない。

皆がどんな思いで、無謀だと思っている戦いに挑んだのかも

「こんなところでなにを？」

突然聞こえた声にフィレアは飛び跳ね、悲鳴が喉に絡みついた。

背後から包み込むようにして立つ男に視線を向け、その正体がエルダだとわかったフィレアは息を吐き出す。

「おや、それは……」

すっと細められた瞳が追う場所に気付き、慌てて本を後ろに隠した。

「あ、あのっ」

「隠してたのになあ。こうも簡単に見つかってしまおうとは」

「え？」

隠していた。

その言葉に思わず声が漏れる。

「隠してたって……」

あんなに見つかりやすいようにしておいて、隠していたと。

神様について書かれた本がないか探しているとその本はすぐに見つかったのだ。

たくさんの本があるにもかかわらず、何故か目を惹いた。主張するように置かれた本は、意図して隠されたものとは思えない場所にあった。

まるでここに来るのが分かっていたように、その本を探すと分かっていたように。

困惑するフィレアにエルダは微笑し、

「フィレア」

そう口を開いた刹那、廊下で金属音が鳴り響いた。

耳をふさぎたくなるほどの音はけたたましく鳴り、城内を占める。

「な、なにっ……！？」

「暴徒が　！！　武器を持って　！！」

簡潔な言葉を叫び、男は金属音を鳴らしながら廊下を走る。

けれどその言葉ですべて把握した人々はそれぞれの場所へと走っていく。

「フィレア、行こう」

「え？」

「ここだと危ない。さすがに城の中まで攻めてくることはないだろうけど、もしもの場合ね」

戸惑うフィレアの手を引き、エルダは資料室の扉を開けた。

その瞬間、先ほどよりも凄まじい金属音にフィレアは身をすくめる。

硬い何かで打ち鳴らしているのだろうそれは、あちこちから絶えず聞こえてくる。

「大丈夫。カイとヴェントがあたっているはずだよ。そう大事にはならないはずだ」

「カイとヴェントが!? あの、これって……」

「このまま真っ直ぐ行つて、右に曲がる。その階段を上がった先の部屋で隠れていて」

大丈夫だと言うエルダの顔が妙に緊迫しているのを見たフィレアは問いただそうとした。けれどエルダはそんな彼女の背中を押し、走るように促す。

ちらりと背後を見ると行けというように顎をしゃくるエルダが見えた。

一瞬戸惑ったがこのままここにいっても迷惑になるだけだとフィレアは言われたとおりの道を走る。

「南門!!! 暴徒の数は」

部屋に滑り込む直前、そう叫ぶ兵士の声が聞こえた。

侵入を防ぐために閉ざされた南門には、城を守るようにして立つカイとヴェントの姿があった。

「出来るだけ気絶で済ませろよ」

「ああ、わかつている」

二人の見据える先には、それぞれ武器を持った男たち 暴徒がいる。中には武器を持たず素手で挑もうとするつわものもいた。

殺気立った目で睨みつける暴徒は今にも襲い掛かってきそうな雰囲気だ。

カイはちいさくため息を漏らした。

こういったことはよくある。

国にたいしてなのか理由はさまざまだが、こうやって時々攻め込んでくる。どんなに力の差があったとしても、懲りずにまた違う輩が攻めてくる。

極力怪我を負わずにしているのだが、こつも何度も攻められてはいいい加減本気で打ち負かしてやろうかと思う。

低く、独特の構えをとったカイはちらりとヴェントを見た。

「お前は左側担当な」

「了解」

短く指示され、ヴェントもまた構えを取る。

その瞬間二人の纏う雰囲気が変わったことを読み取ったのか、暴徒は武器を持つ手に力を込めた。

そして同時に地を蹴り

「待て」

交戦する寸前、低い男の声が耳朵を打った。

突然現れた男は緊迫した空気に似つかわしく、ゆったりと歩いてくる。

今まさに交戦しようとしていた暴徒はその男の登場に目を見開いた。

「勝手に動くなって言っただろ。それも同じ場所に固まって……ぶざけてんのか？」

「す、すみません……！！」

ぎろりと睨みつけ、薄汚れた男はそう言い放つ。

こういった騒ぎには兵士ではなくカイとヴェントがやることになっている。

毎度暴徒たちを退けている二人のことを考えれば、同じ場所に固まって侵入を試みるのは無謀だろう。

なのに、男に睨みつけられてちいさく震える暴徒は固まって行動した。

それは

「大方直前で怖くなっただろ」

びくりと暴徒の肩が揺れる。

一度も負けたことのない二人のことは下町でも有名なのだ。そのことは暴れる暴徒にも知られていた。

ばらばらで攻め、負けることを思えば束になって戦った方がいいのではないか　そう考えたのだ。

「まあいい。……おい、お前」

吐き捨てるように言った男の目線の先には、いまだ警戒を解くことのないカイがいた。

「お前、長剣か？」

「……だっただら？」

そう答えるカイに男はぬるく笑う。

「こいつと戦う。そっちのやつはお前らがやれ」

「は、はい！」

そう返事をした暴徒はそれぞれに戦闘体勢に入り、誰からともなく床を蹴った。

カイとヴェントは走りながら剣を抜き　そして金属音が響いた。

暴徒とヴェントから少し離れた場所で、男とカイが対峙している。すでに剣を構えているカイとは違い、男はのんびりと鞘から抜く。

「悠長だな」

「そうか？　それでも急いでんだけどよ」

「へえ……」

その瞬間、カイは男に向かって剣を振りかざした。

その速度は避けきれるものではなく、まだ殆どが鞘の中に収めてある剣では受け止められないもの。

けれど

甲高い、金属の触れ合う音があたりに響き渡った。

「っ……！？」

「ふん、まあまあだな」

カイは目を見開いた。

さっきまで殆ど男の剣は鞘に収めたままだった。だが、今はカイの剣を受け止めている。

カイはとっさに後方へ飛び去った。

「打ち込みはいい方か……」

男は軽く鼻を鳴らす。

片手で受け止めていたにもかかわらず、男は飄々としている。

あの速度で、あの打ち込みを片手で受け止めたにもかかわらず。

カイは人知れず頬を緩めた。

「あんた、見たことない顔だな」

剣を構え直し、疑問を投げつける。

今までに襲ってきた暴徒にはいなかった顔だ。他の暴徒たちを見る限り、この男がリーダーなのだと分かるが、一度も攻め込みにき

たことはない。

「名前は？」

「名前、ねえ……教える義理はあるのか？」

どこか小ばかにするような声色で男は言う。

「義理はない。でも、俺の剣を簡単に受け止めた奴はそうそういないでね……!!」

勢いよく地面を蹴る。

剣を持つ手に力をいれ、刃を丁度いい角度に直す。

当たれば確実に命を落とす角度に。

「……だめだねえ」

そんなカイを見てぽつりとつぶやいた。

「そんなんじゃ俺には一太刀も与えられない」

激しく剣と剣が交じり合う。

男は微笑して、剣先の向きを変えた。

孤を描く剣に素早く反応し、カイは体勢を低くしてすばやく避ける。

「基本はいいんだがなあ……。もうちょっと、こつ……」

な、と男は小首を傾げてみせる。

おかしい。

カイはそんな男を見ながら眉をひそめた。

剣は最初のまま片手で持ち、受けるときも斬りつけるときも片手だ。

見たところ重量はまずまずで軽く作られたものではない。

ではなぜ。

「……なあ、あんたって何の仕事してる？」

「は？　なんでそんなこと聞くんだよ。戦いに関係ねえだろ」

「関係ある」

普通、片手で剣を扱うことは出来ない。短剣なら、そこそこ軽いものならできるけれど。

だが男の持っているのはそこそこ硬く、丈夫に作られ重い剣だ。

それを長時間片手で持ち続けるとしたら、かなりの腕力が必要になる。それにカイの攻撃を二度も受け止め、切りつけようとしたのだ。

「……ま、そんなくらは答えてやる。商人だ」

「商人？」

「そう、だ。各地に出向いては物を売って生活している」

「た、たかが商人がそんなこと……！！ それになんで剣なんか持つてんだ！」

「必要だろ。道中危険な目に遭うんだからよ。こういう仕事してつとな、むやみやたらと絡んでくる奴らがいて……商品横取りしようとするんだよ」

そう言って啞然としているカイに微笑んでみせ、

「わかったか？ だから、剣は持つてる」

と剣をちらつかせた。

「……じゃ、じゃあなんでその商人がこんな攻め込みに来てるんだよ」

「やれやれ。質問の多い奴だな。……確かに商人はこんなことしない。でも金貰ってるんだ。この反乱が成功すれば、金を貰う約束してる。俺は買われたんだ」

にやりと笑う男をカイは茫然と見詰めた。

城内には微かに外からの怒鳴り声が聞こえてくる。

荒れ狂ったような叫び声や怒りの感情を直接ぶつけたような怒声。それらが聞こえてくるたびにフィレアは肩をすくめた。

エルダに隠れていると言われた部屋でちいさくうずくまり、フィレアは両手を握り締めたまま目蓋を閉じている。

「……っ」

なにが、起こっているのだろうか。

正確なことは伝えられていないまま、ここまで来させられた。城内に走り回る人の慌てっぷりを見ればただ事ではない。

「暴徒」

暴徒が、武器を持って。

そう叫んだ兵士の声が耳底に残る。そして、もうひとつ先ほどから絶えず頭の中で反芻している声があった。

「数は 二十」

< 4 >

フィレアは辺りを見渡しするりと部屋から出た。

真っ直ぐに続く廊下を走り、目の前にいた兵士を一人捕まえて、

「カイとヴェントはどこ!？」

驚く男を無視して詰め寄った。

「ひ、姫様!？ 部屋にお戻りください! ここは」

「いいから! どこにいるの……!？」

焦る気持ちが早まる。

何かが起こっているのだ。話から察するに、暴徒が攻めに来て
いるのだろう。

そして二人は

「お願い、教えて……っ」

なのに、自分だけ安全な場所になどいられない。

この騒動の原因はおそらく自分だ。

そして暴徒の数は二十人。二人でどうにかなる人数ではない。

「み、南門に……」

「ありがとう」

絞りだすように答えた兵士に礼を言っ、フィレアはいわれた方
向へと走る。

すれ違う人に驚いたような顔を向けられたが、特に引き止める者
はいなかった。

「ヴェ、ヴェント……!!」

門の前に佇む二人の兵士を押し切って扉を開けると、血に濡れた
剣を二つ持ったヴェントが佇んでいた。

跳ね返った血なのか、自分の血なのかわからないほどついた服を
見てフィレアは青ざめる。

「フィレア?」

振り返り、駆け寄ってきたフィレアに驚いたように目を見張る。

「ヴェント―！」

「なんでここに……ここは危ない、部屋にいる」

フィレアは首を横に振る。
だめだ。

何が起こっているのか、知らなければならぬような気がした。
それが、どんなに残酷で悲しいものだとしても。フィレアの奥底
に眠る何かがそう告げていた。

怪我は、と問おうとした時、床に倒れている暴徒が視界に映る。

「ね、ねえ……ヴェント、この人たちって……」

襲い掛かったままの状態で倒れこんでいる男や、重なり合っている
男たちは皆揃って真っ赤な花を咲かせていた。

斬られた箇所はひとつだけ。見た目は派手なものの命にかかわる
ような怪我ではなかった。

「無事だ。誰も死んでいない。あとで医務室に運んでおくから」

「う、うん」

小さく頷いて、もう一度倒れた暴徒を見る。

ここに倒れている暴徒の数は二十人ほど。攻め込んできた人数と
同じ。

その全てをヴェントが倒したのだ。

感心する気持ちと複雑な気持ちが入り混じる。

複雑な表情で俯いていたフィレアにヴェントが声をかけると、は
っとしたように、

「ヴェント、カイは!?」

再び青ざめた顔で服の袖を掴んだ。

てっきり二人は一緒にいると思っていたのだ。

けれどここにはヴェントしかない。

「大丈夫、カイと戦ってるのは一人だ。俺が見に行くけどフィレア
はここに……」

安心させるように言うヴェントの声を遮って、フィレアは視線の
先に駆け出した。

ヴェントが見たのは、門の隣にある小さな庭のような空間。

ふたりのいた場所からでは四角になっていて、庭の様子は見えなかった。

「フィレア!？」

背後で自分の名を呼ぶ声が聞こえる。

けれど足は止まらない。

危険なことだとはわかっていているつもりだ。自分が駆けつけたところで、どうにもならないことも。

でも

「カイ……ッ!」

庭に足を踏み込んで、フィレアは目を見開いた。

茫然と男とカイを見る彼女に、

「ふい、フィレア様!？」

驚いた声を出すカイは体のあちこちに傷をつけていた。

顔や腕に細かな傷がいくつもあり、所々服が赤く染まっている。

きつと今見えていない所にも怪我をしているのだろう。

フィレアはカイに駆け寄ろうとしてその視界に剣を構える男が見えた。

その姿を、カイは見えていない。未だに視線は彼女と絡み合ったままなのだ。

「……カイ!!」

思わず叫んで走り出したその瞬間、カイがぐぐもった声を漏らした。

「ぐっ……」

苦しそくに顔を歪めるカイの額には玉のような汗が浮かんでいく。カイの腹部には男の剣が深く突き刺さっていた。

瞬時、じわりと服が赤く染まる。

フィレアは声にならない悲鳴を上げてぐらりと揺れるカイに手を伸ばし、

「カイっ……」

倒れる寸前で抱きかかえた。

悲鳴が喉に絡まる。

顔を覗き込むと浅くではあるが息をしていた。

ほっと安堵の息を吐くと徐々に血が広がっていく腹部を見て息を呑んだ。

服はすぐに赤に染まり、溢れた血は地面へと滴り落ちた。

呼びかけても返答はなく、かわりに乱れた呼吸音が返ってくる。

苦しそうに顔をゆがめるカイにどうにかしてやらねばと思うのだが、フィレアにはどうすることもできない。

それがとても、もどかしかった。

「お前……」

ぽつりと、酷く驚いたような声が頭上から聞こえてフィレアは弾かれたように顔を上げた。

男の握っている剣からは濡れた血が滴り落ちている。

フィレアは顔を強張らせ、とっさにカイを庇うように抱き込んだ。どくりと心臓が跳ねる。

ぐったりとフィレアに体を預けるカイは徐々に体温が下がってきている気がした。

思わず抱きしめる腕に力を込めたフィレアに男はすっと目を細め、「俺のこと、覚えていないのか」

とちいさく呟いた。

「え？」

「あいつらの話は本当だったってわけか……嘘ついてたんだと思ったんだがな」

クツクツと喉で笑う男の瞳が射るような眼差しへと変わり、フィレアは無意識に後退した。

男は口元を歪める。

警戒するフィレアに男はひらりと踵を返し、肩越しにちらりと見て何事も無かったかのように消えていった。

遠くなる後姿に声をかけることもせず、突然の出来事にただじっ

と見詰めていた。

完全に見えなくなつたところで、フィレアは深く息を吐き出す。かなり緊張していて体が強張っていたらしい。

ふっと力が抜けて倒れそうになつたがなんとか踏みとどまる。

「フィレア！ カイ！！」

焦つた声と共にヴェントが駆け寄ってくるのが見え、

「ヴェント！ カイがつー！！」

必死で言葉を紡ごうとするが言葉が喉につまり、上手く話せない。フィレアはカイをぎゅっと抱きしめ、震える声でヴェントに訴える。

「は、早く治療しないとっ……」

「医務室に運ぶ。……大丈夫だ、フィレア」

そつと小刻みに震えるフィレアの手を包み込み、ヴェントはあやすようにそう口にした。

頷いて、フィレアはきゅっと唇を噛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1009x/>

楽園の果て

2012年1月10日19時54分発行